
笑顔

ショコラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑顔

【Nコード】

N0669B

【作者名】

シヨコラ

【あらすじ】

傷ついた主人公が、一人の男と出会い変わっていく

（前書き）

下手な文章ですが、よかつたら読んでみてください。感想をできたら、書いてほしいです。

私はいつものように、彼の部屋へむかった。

いつもと違うのは、部屋に行くのを内緒にしてる事。

「バイトがはいつたから」

そう言つといて、いきなり行ってびっくりさせようと思ってるんだ

“ピンポーン”

ドキドキしながらチャイムを鳴らす。

「はい。」

“ガチャ”

彼が扉を開ける。

「っ…？もえ？今日はバイトなんじゃっ…」

「んゝ急に代わりの子がはいつたからさあゝ」

私は、中にはいるとした

でも、はいれなかった…とゆつか、動けなかった。

可愛らしい女ものの靴があったから…

「ち…違うんだよ…」

彼は、しどろもどろ…

「最低っ…」

“バチーン”

私は、彼に思いっきり平手打ちをして、その場から走りだした。

「っ…はあ…はあ」

走り疲れ、私は歩きだした

気が付くと、涙で化粧はボロボロ…

私…好きだったのに…

あんなに、祐樹の事愛してたのに…

もう…いい。

男なんて…

愛なんて…

いない。

それから、私は遊びまくった。

ナンパされたら、すぐついていったし、合コンもたくさんいった。

携帯には、たくさんの男のメモリーが増えた。

もちろん彼氏なんて、つくる気はない。

みんな一緒だから…

いつものように、遊んでたら、ナンパされた。

《またか…》

身体目当てな奴らばかり…

それでも、私はナンパについていく。

「とりあえずカラオケ行くかあ？」

ナンパしてきた一人の男が言った。

「行くいくー！」

結局みんなが言うから、ついていくことにした。

「もえちゃん…だよね？」

軽そうに一人の男が話し掛ける。

「うん…」

「まじ、かわいいよね？ちょー俺のタイプ」

あーうざっ

「あはは。うれしいな。」

うざくても、私は一人になりたくないし、傷つくのはいやだから、

愛想笑いをする。

「ねっ？二人でぬけない？？」

しつこいなー。

そう思ってた時。。。

「おいっ！俺、トイレいきたいんだけど、もえ？だっけ…？案内してくんねえ？」

「へ…？私？」

「他に誰がいんだよ」

わけがわからず、手をひっぱられ、私はカラオケの部屋をでた。

助けてくれた…のかな？

「あり…がと」

私は、ぼそつと言った。

「別に。」

そいつは、部屋をでるとパッと手を離れた。

愛想悪いやつ…

第一印象はそんな感じ。

中村雅也との出会いだった

「あんたさー、淋しいオーラでまくり。そんなんじゃ、ヤリ逃げされておわりだよ？」

「っ…なによ！初対面でなにがわかんのか？むかつく」

「まあさ、淋しいなら、俺が遊んでやるから、連絡しな。愛想笑いはっかで疲れんだろ？」

……………はじめて言われた
愛想笑いってなんでわかるわけ？

今まで出会ったやつらは、みんなそんなこと言わなかった。

うつん…気にしてなかった

私の心の中なんてみてなかったのに…

なぜか、私は、そいつと連絡先を交換した。

今まで、愛想笑いってばれないように、ずっと必死で演じてきたの

に。

友達も誰も気が付かなかったのに…

中村雅也…

へんな奴…

それから、一週間後。

私は、雅也と遊んでいた。

たわいもない話。

不思議と雅也は、前から友達だったかのような感じがした。
趣味もあうし、一緒にいて楽しい。

「あははっ。雅也ってバカだねっ。うけるっ」

「初めて、本気で笑ったな？」

「えっ…？」

そういえば、私は、雅也といるときは、愛想笑いしてない…？

こんな楽しいのは、久しぶりだった。

「…ありがとう」

私は、なんだか恥ずかしくなり、下を向きながら言った。

「もえ！お礼は、ちゃんと目を見て言えよ！」

雅也が、私の肩をつかみながら言った。

ドキ…

雅也の、綺麗な目に吸い込まれそうだった…

「ありがとう」

私は、雅也の目をみて、笑顔で言った。

「もえって笑うとかわいいーな。」

くしゃっと私の頭を、雅也がなでた。

それから、頻繁に雅也と遊ぶようになった。

「もえー！今日合コンいかない？？」

「んー、行かない！またね！」

あれから、合コンは行っていない。

雅也といるのが楽しいから

雅也と駅で待ち合わせをしていたし。

私は、急いで駅へむかった

「まさ……」

私は、声がでなかった。

雅也の隣には………

祐樹がいた。

知り合い？

「もえとは、どうなんだよ？」

「ああ。順調だよ」

「そっか。うまくやれよ」
声が聞こえた。

私のこと？

ばつと、雅也と目があつた

「っ…もえ!!」
私はとつさに、逃げ出した

どれくらい走つただろうか？

人込みのおかげもあり、雅也は、私を見失つたみたいだ。

「っ…はあ…」

雅也が見えなくなり、私は走るのをやめた。

「ねえ？一人？俺と遊ばない？？」

またナンパ…

もうどうでもいつか…

なんか雅也もよくわかんないし…

祐樹とも友達で？

私を二人してからかった？？

やっぱ、男なんて…

「いいよっ！二人きりになれるとこいいこ！」

「ラッキー 行こう！行こう！」

私は、見知らぬ男の腕に自分の腕をからめた。

「もえっ！待てよ！」

雅也の声…

「知り合い？」

「知らない。いこっ」

私は、シカトして歩きだそうとした。

“ぐいつ”

雅也は、私の腕をつかんだ

「こいつ、俺のもんだから。諦めて」

「ほっというてよ!」

「…ちっ、めんどくせーな。もういいや。他にも女いるし」

ナンパやるうは、そう言っただけで消えていった。

「なによ!行っちゃったじゃない!」

“バシン”

一瞬何が起きたかわからない。

頬がジンジンする。

「あつ…ごめん。つい…。でも…」

「っ…ふう…。な…なんで、そんなかまうの?祐樹とグルになって、からかってたんでしょ?」

私は、涙があふれた。

いつのまにか、私は、雅也を好きになつてた。

傷つくの怖くて、気付かないフリをしていた。

「違うよ…。たしかに、祐樹とは友達だよ。でも、もえをだましたわけじゃないよ。俺、ずっともえのこと好きだった。祐樹と付き合ってる時から…。写真でしか見てないけど。笑顔がかわいくて…印象的だった」

「えっ??」

「祐樹が、浮気してるの知って、まじむかついたよ。ぶん殴ってた。別れたって聞いて、俺…」

「もえを救ってやりたかった。ナンパは偶然だったけど、あの時のもえは、愛想笑いばかりで…つまんなそうで…。いつだって、祐樹との写真のもえは、最高にかわいい笑顔だった。だから…」

「……雅也…」

私は、雅也に抱きついてた。

「もえ…。俺は浮気しない。絶対裏切らないから。だから、俺と付き合ってくれる？」

「……私でいいの？」

「もえじゃなきゃ、嫌だ！もえをいつも笑顔にしてやりたいんだ。」

「……はい。私も、雅也が好き……」

私は、もう一度信じてみようと思う。

好きな気持ちを大切にしたいから。

ねっ？

人は、裏切られても

きつと恋をする気持ちは

なくせない

だって、好きになる事は

好きになってもらう事は

こんなにも幸せなことなんだから…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0669b/>

笑顔

2011年1月8日19時59分発行